

## 「いと小さき者」

キリスト教は、「小さい」ことが好きなように思います。「小さい」ことの中に積極的な、逆説的な、意外性のある意味を見出していこうとする姿勢が明確です。「小さくされた者」や「小さな灯」や「小さい幼子」に、救いと希望を見つけていく。でも、それは、そもそも「大きい」ことを前提とした判断基準なんじゃないかと思えます。「世の中、大きくて立派なことが好きでしょ?」「偉大で影響力の大きな存在が尊いでしょ?」という、現実世界の常識的価値観に対して、キリスト教は、「いや、小さいところにこそ力が宿り、希望が与えられるのだ」という。でも、それは慎重に考えを進めないと、「大きい」ことを好む世論に対する、逆張りの、あえて主流に逆らうだけの反抗的主張に過ぎないという結論に行き着いてしまいます。つまり、「結局、キリスト教って、世の中と逆のことを言いたいだけなんですよ」というような。

しかし、キリスト教が、そんな世論ありきの、常識ありきの、単純な逆張りの思想を持っているとは私は思いません。「いと小さき者」と呼ばれるイスラエルの片田舎に過ぎない、小さな寒村に救い主がお生まれになるという預言は、世の中が「大きい」を好む傾向が強いことに対して、神様が当てこすりのように、皮肉を込めた御業を示されたわけではないでしょう。そんな、短絡的な浅慮な、浅い御心ではないですよ、きっと。神様の御心は、単なる人間心理の裏返しではありません。「人間たちがこう考えるなら、じゃあ、私はこうしよう」という感じで、人間の考えの逆を行うのが神様ではありません。そうじゃなくて、神様が正しく真っすぐに支配される世界にあって、いかに人間が自らに都合よく物事を考えて葛藤しているか、という視点が重要なのだと私は思います。もちろん、その葛藤には意味があり、必要な経験であるとも言えますが、いよいよ行き詰まり、

思い悩みに対して全く答えが見出せない中で、ふと神様の御心に訊いてみることで、新しい道筋が与えられる、ということもあり得るでしょう。神様は、私たちには思いも及ばない解決策を、進むべき道を示してくださる、そんな方であるということです。思考の隘路に迷い込み、思い悩んだ末に行き止まりに当たってしまう時に、でも、新しい方向性を見つけることができるように。神様は常にブレることなく、私たちに語り掛け、祝福を置いてくださるのです。

そんな風に、神様の御心を思い描きつつ、今日の聖書箇所を詳しく見て行きたいと思います。ミカ書5章の1～3節は、このミカ書が収録されている旧約聖書にあっては、つまり、ユダヤ教にあっては、帝国アッシリアからの解放、遠い未来における救世主の誕生というメッセージを語っています。また、私たちキリスト教にあっては、明確に主イエス・キリストの御降誕の出来事に紐付けて解釈され、遠い未来ではなく、今から約2000年前に実現した最初のクリスマスを預言するものとして理解されています。まずは、そんな風に2通りの受け止め方があることを知った上で、私たちクリスチャンにとっての、「いと小さき者」の意味を考えてみたいと思います。果たして、それは「大きい」ことを好むことの多い現代社会に対する、神様の皮肉に過ぎないのでしょうか。

「大は小を兼ねる」という諺があります。大きいものは、小さいものの価値や役割を担うことができる、ということです。それは、手紙の封筒を選ぶ時にも、料理を盛るお皿を選ぶ時にも、あるいは、ある役職に就かせる人材を選ぶ時にも、適用される考え方であると言えます。経験値が小さい人よりかは、経験値が大きい人の方が何かと融通が利くというような。しかし、これも日本語の面白いところですけど、「大は小を兼ねる」という非常に尤もらしい諺がある一方で、「杓子は耳搔きにならず」という諺もありまして、杓子とは、現代生活では、炊飯器からご飯をよそう「しゃもじ」や。鍋から味噌汁なんかを掬う「お玉」などの食器用具ですね。確かに、「しゃもじ」や「お玉」じゃ、耳搔きは出来ません。この諺は、つまり「何でもデカけりゃ良いってもんじゃない」と

いう意味ですね。これもこれで世の中の真理だと思います。そして、キリスト教が伝えるクリスマスのメッセージも、「デカけりゃいいってもんじゃない」という一面があるんじゃないかと思います。小さいからこそ、良いよね、っていうメッセージですね。

もしも、救い主がエルサレムという聖なる都、大きな都市にお生まれになっていたなら、そのメッセージにはどんな変化が生じたのでしょうか。おそらく、地方や辺境の土地に対する認識が、だいぶ薄く、少なくなったかと思います。それは、もしかしたら、現実の宣教活動、伝道実績にも影響を与えたかも知れません。神様は、地方ではなく、宗教と信仰の中心である都会に御心を傾けられる、という神学が成立し、世界宣教における地方への関心は後退した可能性があります。福音書に記されている「大宣教命令」の範囲が狭められたかも知れない、という仮説は、あながち間違いではないでしょう。そういう宣教の点から見ても、確かに「いと小さき者」であるベツレヘムに救い主イエス様がお生まれになったことの意義は十分に見て取れます。それは、救い主がお生まれになる場所を通して、神様が「どこも、誰も見捨ててくれない」というメッセージを伝えておられると、そう受け止めて良いでしょう。

また、「小さい」とは、言い換えるなら、「大きい」に変化する、成長する可能性を持っているということです。とくに成長という可能性の点から言えば、「小は大を兼ねる」という逆の言い方も当てはまるかも知れません。私たちが、教会学校や教会幼稚園で、子ども達に託している希望は、まさに、この視点によるものですよね。子ども達の立場から言えば、ちょっと鬱陶しいのかも知れませんが、でも、大人である私たちは、私たちに成し得なかったことを・・・、「大きい」存在では、すでに不可能なことを、「小さい」彼ら、彼女らに託している。未来へ向けた私たちの願いは、より「大きい」誰かにではなく、より「小さい」誰かに委ねる他ない。救い主が「いと小さき者」であるエフラタのベツレヘムにお生まれになったのも、その小ささに秘められた可能性に神様が重

きを置いたからなのかも知れません。大きな都エルサレムでは、すでに不可能となっていた働きに対する現実的な解決策が、小さな村であったベツレヘムにはあったのではなかろうか、という。ベツレヘムは、特別な王様であるダビデの出身地でもありました。ダビデが生まれた時から、ベツレヘムは小さな村に過ぎませんでした。小さいからこそその変革の可能性を神様は歴史上一貫して示されてきたと言えるでしょう。それは、現代におけるキリスト教信仰の考え方にも影響を与えるものです。確かに、都会には大きな教会があります。大勢のクリスチャンが住んでいます。地方から見れば、それは羨ましく見えるかも知れない。私も、先日大阪に行って、敦賀教会が大阪のど真ん中になれば、きっと沢山の人が集まるだろう、なんてしょうもないことを思っていました。でも、もしかしたら、神様の尊い御業は、地方から始まり、都会へと伝播していく、という信仰的な見方もできますよね。北陸から、もしかしたら、敦賀から。何かは分かりませんが、何らかの御計画が始まると言うのは、「いと小さき者」というミカ書のメッセージを今日聴いている私たちには、あながち無理筋でもない。神様を信じると言うなら、いっそそれくらいの勢いで、キリスト教の未来を考えてみるのも悪くないと思います。神様の視点から見て、地方や都会という条件に、どれほどの意味があるのか、捉え直してみることは、神学的にも重要かも知れませんね。

来るクリスマスの日。「いと小さき者」と呼ばれたベツレヘムに、いと小さき幼子イエス様がお生まれになりました。それは、神様がはるか昔から御計画されていた出来事であり、たとえ人の目には不思議に映っても、キリスト教が大切に続けてきた大きな恵みの出来事でした。そして、その不思議な出来事は、教会という小さな集まりを超えて、社会に広く大きく伝播し、実際に、あらゆる場所で盛大に祝われるお祭りとして定着しています。その現実を見て、私たちは、「間違っただけのクリスマスが行われている」と思うのではなく「神様とイエス様の招きが、大きく広がっている」と捉えるべきでしょう。今年も、沢山の人を巻き込んで、誘い合わせて、教会で、各ご家庭で、ある

いは、どこかのお店で、お宿で、楽しいクリスマスを迎えたいと思います。「いと小さき者」から始まったクリスマスの、世界規模で盛大な広がりの中に、神様の御計画が秘めている「大きさ」を認めつつ、ワクワクした気持ちで、このアドベントの日々を過ごして参りましょう。お祈りを致します。

神様。私たちは、いよいよクリスマスに向けたアドベントの日々に入りました。特別な毎日が始まります。教会も幼稚園も、クリスマスを盛大に祝うために、ページェントの取り組みを始め、祝会の準備をし、そして、心の中では、「どうか、全てが上手く行きますように」と祈りつつ、目の前の働きに励んでいます。もう、本当に、その通りです。私たち皆が、楽しく、喜んでクリスマスをお祝いできるように。「どうか、全てが上手く行きますように」、あなたが、このアドベントを祝福で満たし、導いていてください。クリスマスを前にして、期待も、自信も、喜びも小さい教会員や教職員や、あるいは牧師がいましたら、その小ささをこそ祝福し、私たちの思いを超えた大きな喜びへと、あなたが引き上げてくださいますように。どうかお願いを致します。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。

## 12月誕生者の祝福祈祷

聖書：イザヤ書 46 章 3～4 節

あなたたちは生まれた時から負われ／胎を出た時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで／白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。

神様。私たちは、主のお生まれを祝うこの12月に、あなたによって尊い命を与えられ、また、私たちの友となってくれた12月誕生者の方々を憶えて祈りを合わせています。今、ここにお立ちになっている方々の人生を振り返れば、山があり谷があり、そういう道を歩いて来られたらと思います。しかし、その深みにある時も、また、その頂きにある時も、いつもあなたが隣にいて、支え導いてくださったのだと信じます。それぞれの誕生の日から始まる新しい1年間も、どうかあなたが傍にいて、その喜怒哀楽に寄り添い、時に応じた相応しい御業を示してください。あなたに連なる人生に、大きな喜びと幸いを、どうかお与えください。また、人は一人で生きるものではなく、12月誕生者の方々の周りにも、大切な家族、友人、同僚がいることと思います。どうか、その人と人が繋がる、尊い和の中に、あなたもいてくださり、繋がり合う多くの人たちの上にも恵みと祝福を置いてください。神様と多くの人々に愛されて、これからも歩いてゆくことができますように。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。